

■ハニートラップ無効！

新世代のVRネットワーク『LINK VRAINS』内で密かに活躍する謎の美女、ゴーストガール。様々な企業から秘密裏に依頼を受け、ネット上のあらゆる情報を収集する『電腦トレジャーハンター』として今日も人目を掻い潜り暗躍していた。

【……金は持ってきた。約束通り……】

「ふふ……焦らないで。約束は守るわ」

電腦空間内でも人気のない場所で、ある男と取引を行うゴーストガール。
入金を確かめた後、依頼されたデータをカード状にカモフラージュして男に渡す。

【確かに、依頼通りのデータのような。しかしこんな情報を手に入れられるとは、一体お前は何者なんだ】

「そうねえ……端的に言うなら、お金で雇われる魅惑の謎の美女ってところかしら」

電腦情報屋としての仕事ぶりが優秀なあまり、逆に怪しむ視線を向けられる。それを茶化すように、ゴーストガールはあえて自画自賛の戯れで受け流す。

自ら『魅惑の美女』を名乗れば、大抵の男は呆れるだろう。しかしゴーストガールの場合、決して自意識過剰にはならない。

一見してやや長身なスレンダー体型だが、胸部と臀部にはしっかりと肉が乗っており、身体にフィットする黒と紫のスーツでボディラインが強調される。

顔の形も整っており、口元をマスクで覆っているのがミステリアスな雰囲気を醸す出す。

魅惑と名乗ることに誰も不満を抱かない容姿……これもまた、裏の世界でゴーストガールが人気を得ている理由の一つでもある。

「じゃ、私はこれで……」

手を振る動作と共に、身体が消えていくゴーストガール。彼女のログアウトを見届けながら、取引相手の男がほくそ笑む。

というのも、男は密かにゴーストガールのアクセス解析をしていたからだ。むしろ取引は半分囹であり、男の本命はアクセス解析の方である。

アクセス解析が完全に終われば、個人情報も筒抜け。住所に本名……更に所有データまで、ゴーストガールの正体を丸裸にすることができる。

そうすればこれ以上ない脅迫材料となる。有能な彼女を、その能力も、美貌も……あらゆる意味で使い放題というわけだ。

ログの解析を続け、今まさに目的を遂げようとした時……男の笑みが驚愕に塗り替えられる。

【なんだと？！ ……あの女、全て見越していたのか……！】

解析中のデータが、全て消去されたのだ。ゴーストガールは自分が解析されていることに既に気付いており、痕跡を残さぬよう手を加えた上で、何も知らないかのように取引をしていたということだ。

卑劣な手を使ったとはいえ、まんまと手玉に取られた形となった男は、屈辱の意をデータの波に溶かせるしかないのであった……



——後日。またゴーストガールは不休で電腦空間内の仕事に励む。

今回行うのは依頼された情報の収集。各企業のネット上データにアクセスし、その一部を解析して手に入れることだ。

当然見つかつては今後の活動に支障が出る。誰にも見つからぬようセキュリティを掻い潜り、光る粒子の壁となったデータの塊へと辿り着くのだが……

【……そ、そこのあなた！ いつの間に……どこから来たんですか！】

「あら、見つかったちゃった♪」

そこで、一人の男……この企業のセキュリティ担当をしている門番に見つかってしまう。

本来ならすぐさま逃走するところだが、ゴーストガールは一切驚愕の色を見せず、逃げる素振りもない。

なにせ、この門番に見つかることも想定内だからだ。

今回のターゲットは大企業。無人のセキュリティは高性能で、更に見張りの門番まで配置されている。それら全ての眼を出し抜くのは、ゴーストガールといえど短時間では不可能。

よって、門番に対してはハッキングとは別の手段で対処することに決めていた。

【ひっ?! あなた……まさか、ウワサのゴーストガール……?】

「あら、私のこと知ってるのね? 嬉しいわ♪」

門番は誰もここに来ると思っていなかったからか、かなり慌てている。

対し、ゴーストガールは落ち着いてデータを解析し……目的の情報を手に入れるや、見られてはならないはずの門番に対して近付いていく。

逃げるところか、可愛らしい笑顔で近付くゴーストガールに恐怖する門番。

だが男の眼は、しっかりとゴーストガールの妖艶な美貌と肉体に向けられていた。

(これなら、いけそうね♪ こんな手を使うのは久々だけど……)

門番に見つかったにも関わらず、ゴーストガールに焦りや不安はない。

なにせ門番に対しての対処法は、彼女の美に見惚れる男に対して最も効果を発揮するからだ。

「ねえ門番さん？」

【な、なんでしょう?】

「ここに来たこと、見逃してくれない？」

【いや、それは、その……】

色っぽく髪を掻き上げながら堂々と接近し、顔を近付けて媚びる。

対処法……それは持ち前の妖艶さで翻弄することであった。

いわゆるハニートラップの一種だ。男をその気にさせ、裏をかくて口止めする……ゴーストガールのような美貌と掴みどころのない雰囲気を持つ美女にのみ許されたトラップカード。最近はハッキング技術の向上により使わなくなった手段だが、過去にはこの手で何人もの男を手玉に取ってきたことがあるのだ。

「もちろん、タダとは言わないわ♪ 見逃してくれれば、口止め料として色々と……ね？」

密着し、細長い指で門番の顎をなぞる。門番は女に免疫がないのか、顔を朱くさせて固まってしまう。骨抜きにできるのも時間の問題だ。ゴーストガールはダメ押しに男の顔を両手で掴んで正面から見つめると、大きく盛り上がった胸を近付ける。

ライダースーツを模した服。首元まで上がったチャックに手をかけ、ゆっくりと下ろす。

門番が釘付けになる中……首元から露わになり、続いて鎖骨 谷間が見えていく。そして谷間が全て晒され、ヘソまで見え……これからという時に、ゴーストガールの肌が眩しく輝きを放ち、門番の視界を塞ぐ。

【——っ?!】

アバターの肌にあらかじめ仕掛けていた目晦ましのギミックが発動したのだ。これを浴びれば小一時間は行動不能となり、ゴーストガールに関するデータも消失する。これで男は門番としての機能、更にゴーストガールを発見した証拠も失うというわけだ。

色香に惑わされて間抜けな顔をしていた男は閃光を喰らって堪らず眼を覆う。その隙にゴーストガールは素早く衣服を元に戻し、身を翻して颯爽とその場を離れる。

「ごめんなさ〜い♪ 次はもっとサービスしてあげるから……♥」

『ゴーストガール——あなたのプラン通りで、相手のライフをゼロにできます』

ウィンクと共にあざとくからかう台詞を放つ。同時に使用ツールのA I からもメッセージが現れ、デュエルのライフになぞらえて成功間近であることを客観的視点からも告げられる。

あとはログアウト可能な領域まで逃げ、現実世界に戻って本日の仕事は終了。

大企業を相手に難なく立ち回り、データの闇の中を音も無く静かに駆けて余裕の笑みを浮かべる電腦トレジャーハンター。しかし、そのすぐ後ろにもう一つの影が迫っていた。

(ま、私にかかればこんなものね♪ ……………え?)

影は高速で走るゴーストガールにすぐ追いつくと、闇の中でも妖しく左右に揺れる尻肉を狙ってきた。

(速い……! 私に追い付くなんて、何者なの?!)

宙返りして回避しつつ振り返り、華麗な着地と共に確認する。するとそこには、先ほど行動不能になったはずの門番が立っていた。

いや、厳密には先ほどまでとは異なる人物だ。少しずつ外見を構築するデータが変化し……門番が、以前 取引時にゴーストガールのアクセスを解析した男に変化する。

【……よう、また会ったな】

「この門番、あなただったの？ ……いえ、違うわね。私を狙うためにこの会社のセキュリティとして働いた……ってとこかしら」

男が口端を浮かべ、嫌味な笑みを作ることによって肯定する。そしてゴーストガールも男の視線を見て、その執念と目的を悟る。

彼は数日前の取引の時から、ゴーストガールを自分のものにすることが目的だったのだ。アクセス解析を妨害されて屈辱を味わった男はまた別の手段でゴーストガールを調べ上げ、この企業の情報を狙っていると知るや、わざわざ偽の人物まで演じて待ち伏せしていたのだ。

「私を騙した上に、あのトラップから抜けるなんて……やるじゃない」

【俺も少しは名の通った電腦トレジャーハンターでな。だがお前のおかげで仕事が減ってなあ……いつか目に物をみせてやりたいと思ってたんだが】

細く入り組んだ道の行き止まりに追い詰められ、もう逃げ場はない。男は今度こそ自分が勝利したと確信し、勝ち誇った笑みで歩み寄る。

【気が変わった。電腦空間内では俺のために働く情報収集ツール、それと肉便器になってもらう……そうすれば現実には関与しないでやる】

以前よりも遥かに高性能なシステムを使い、ゴーストガールのデータを解析しつつあるハッカー男。このままでは全てが丸裸にされ、まともな生活が送れなくなる。少しの沈黙の末……

「わかったわ、サレンダーよ。電腦空間内だけでいいなら、私を好きにして構わない」

大人しく両手を上げ、降参を宣言。カード状にしたツールが手元からばらけ落ち、抵抗の意が無いことを示す。

「現実にも手を出されたら、私でもどうにもならないわ。……で、これからどうすればいいのかしら？」

【服従の誓いとして、全てを曝け出してもらおうか】

「……今ここで？」

【当然だ】

つまり即座にストリップし、アバターとはいえ肉体の情報を全て公開しろ、ということか。

武器を捨てる動作だけでは信用できない、というのもあるだろうが……男は時間をかけて追いかけ、ようやく捕らえた獲物を今すぐに愉しみたいらしい。

僅かな逡巡の後、仕方無く男の要求に応じて再びチャックに手をかける。眉をしかけ、悔しさが伝わり男の笑みがまた下衆なものになる。

だがこの悔しさの表情も、ゴーストガールの演技だ。身体に仕込んだトラップは何も一つだけではない。マスクの下で、実は切り札を潜ませている余裕を隠しながらチャックを下ろしていく。

胸元からヘソまでが再び男の眼に晒される。今度は閃光が生じない。そう男も思っているだろう。

【さあ、その下もだ。全部見せろ】

「わかってるわ、焦らないで……」

更にヘソから下……下腹部が見え、いよいよ股間部が見えそうになる。
アバターとはいえ、性器部分も忠実に作成されている。見られれば少なからず羞恥を味わうことになるが……
ゴーストガールはこのような事態にも備え、ここにもトラップを仕込んである。男が勝利に警戒が緩み、今度は演技ではなく本気の視線が注がれている。だからこそ、次は引つかかるはずだ。
視線が突き刺さる中、いよいよ恥部が露わになりかけ――

(かかった……！)

ずんっ！

「お……っ！」

第二のトラップが発動する間際、ゴーストガールの大きく柔らかな胸に拳がめり込む。
不意打ちを潰す攻撃に息がつまり、苦悶を漏らす美女に男が拳を埋め込ませながら怒りを告げる。

【何度もその手が通用すると思ったか？ 甘いんだよ淫乱女……！】

眼を引く美貌を利用したハニートラップへの怒り。それが拳に乗せて叩き込まれたのだが……どうもその口ぶりからは、その彼以外の男の怒りも込められている気がした。

【今までそんな手を使って散々男を手玉に取ってきたようだが……そろそろ報いを受けてもらうぜ】

男が手を上げて誰かにデータを送る。すると彼以外にも様々な男たちがこの場に出現してきた。

「ぐっ、かはっ……」

(嘘……こいつらって……)

現れた男たち。それはハッカー男の言う通り、かつてゴーストガールが色仕掛けやそれに類する手段で出し抜いてきた相手だった。

そこでようやく気付かされる。今回ゴーストガールを捕らえたのはハッカーだけではない。かつてゴーストガールに苦汁を飲まされた男たちが集団で復讐するために手を組んでいたのだ。

【ようやく会えたよゴーストガールさん】

【フヒヒ……あの時の続きをさせてもらおうか〜ゴーストガールたん〜♪】

全員が怒りと欲情の眼を向け、胸の苦しみにうずくまるゴーストガールを取り囲む。見ながらも総出で更にデータを解析され、身体のあらゆる場所に仕込んだトラップが全て公開され、除去されていく。

【まだこんなに仕込んでやがったか】

【お尻にもありましたよ】

【でもこれで本当に完全除去だね〜〜♪】

「……！」

いつも自分に魅了されている男たちに、逃走と抵抗の手段を奪われる。今まででは有り得ない事態に言葉が出ない。

掴みどころがなく、常に余裕を見せて男を翻弄していた魅惑の美女が動揺どころか呆然とする姿に男たちは更に興奮していく。

【さて……そろそろメインフェイズを始めるぜ！】

「っ！ 来ないで……あっ！」

男たちが一斉に手を伸ばす。今のゴーストガールではとてもそれらを回避できず、手足を拘束され身動きがとれなくなったところでハッカー男が胸に触れる。ハッカー男は遠慮するつもりはないらしく、先ほど殴られた胸を乱暴に鷺掴みにされ、重たく響く感覚に小さな悲鳴が漏れる。

【さっき殴らせてもらったが、随分柔らかいな……お、乳首勃ってねえか？】

「あら……頭の中までバグったのかしら？ そんな都合のいいこと……っ！ あるわけ……っ！」

男がスーツの中にも手を潜らせ、乳首に指を食い込ませながら快楽を得ていることを指摘してくる。

当然 否定するが……女に対する気遣いも何もない手付きであるにも関わらず、与えられる刺激には不快感や痛みがなく、込み上げる熱感に時折 息が詰まる。

（どういうこと……？ まさか……こんなことで、もう感じてるとでも……？）

明らかに異常な身体の反応。今 思えば、胸を殴られた時も息苦しさこそあれ、痛みはほとんどなかった。あの殴打の際に何らかのウイルスを流し込まれ、身体のデータを書き換えられたのだろう。結果、感覚が変化し……痛みを感じるような刺激にも性感を得るようにされているのか。

「あなた……私の身体に、何を……っ！」

【なに、ちょっとバグらせて淫乱女に相応しい身体にしてやっただけだ】

効果の速攻性と強力さは信じがたいレベルだが……実際、早くも胸の先端は熱を帯びて硬くなってきている。男は両方の乳首を根本から持ち上げ、本人の意志に逆らい素直に反応する肉端をゴーストガール自身に見せ付ける。

「あっ……」

【おい、マジでもうビンビンじゃねえか！ 見ろよお前ら！】

「ああっ♥ ぐ、このっ！」

痛みを感じるはずの強い刺激が、快楽に変換される。乳端が明確に快楽に反応し、勃起して欲情を主張する。堪らず喘ぎが出てしまい、これ以上の羞恥を防ごうと手足を暴れさせる。

「離しなさいっ……あぐっ！ ううううっ！」

【まだ暴れる元気があんのか……もう無駄だって悟れよアバズレがっ！】

だが、反抗の意志を見せた瞬間に男に羽交い絞めされる。仕事柄、身のこなしには自信があるゴーストガールだが……簡単に肩が振じ上げられ、データ上とはいえ、筋力における男女差を再認識させられる。

【男の裏をかいてきたつもりだろうが、結局 本気になった男には勝てねえんだよ。……おい、まさか今のでも感じたか？ 女ってのはウイルスにも弱いんだな】

「う……！ くう……っ♡」

(嘘でしょ……こ、こんな、ことで……感じるなんて……)

ウイルスが想像以上に効果を発揮し、愛撫どころか絞め技をかけられても快感を得てしまう。僅かとはいえこんな攻撃にも感じてしまい、それを男に蔑まされる。屈辱的なはずなのに、その感情すら快樂に変換したかのようには下腹部に媚熱が溜まっていく。

【まさかもう濡れてたり……おいおい、ぐしょぐしょ過ぎだろ！】

「やめなさいっ！ そこっ……んんんっ♡」

羽交い絞めが解かれ、脱力したゴーストガールに男が性責めを開始。今度は股間部に手を突っ込み、秘部……ウイルスによる強制発情効果の影響で胸の愛撫、羽交い絞めを経て驚くほど牝蜜が溢れた陰唇を揉み回される。

スーツの中でぐしゅぐしゅと音を上げられ、更にチャックごとスーツを破られて中身が晒される。

【いい画ですねえ、いかにも経験豊富に見えて、実はリョナで感じるドMだったとは。あ、ちなみに録画してますので、カメラ映りも気にして下さいね】

【ゴーストガールたん、やっぱりノーパンなんだね♪ 淫乱だからすぐセックスできるようにしてるのかな？】

【クリもビンビンだなあ？ たったこれだけで感じすぎだろ！】

「あ、あなたが、無理矢理ウイルスで……あっ♡ やめ♡ つふっ♡」

他の男たちも光景を小さな歓声を上げながら、録画なり観察なり好き勝手してくる。反論しようにも陰部に触れられると、羽交い絞めの比ではない快樂が発して全身に突き抜け、まともに発言すらできなくなる。

(このウイルス、強すぎるっ♡ こんな、感じるわけないのに……もう……っ♡)

現実では到底不可能な、電脳空間だからこそ可能な強制発情。触れられれば触れられるほど快樂の熱が増し……ただ指で弄られているだけなのに、もう絶頂の波が近付いてくる。

「くっ♡ あ……っ♡」

【まさかもうイキそうなのか？ ああ？】

「うっ♡ く♡ ふっ♡ あっ♡ つあ……♡」

『警告——プラン変更がなければ、あなたのライフはゼロになります』

今まで男には聞かせたことのない音色を次々と奏でてしまう。陰核が発熱し、牝孔が疼き、腰が痺れ……下半身全体が震え上がる。

いよいよ絶頂間近となり、A Iが絶頂を『活動できないレベルのダメージ』と認識して警告メッセージを発する。

【おっと……】

「ひあっ?!♥」

と、そこで男が責めの手を止める。男はA I のメッセージも覗き見ているらしく、絶頂寸前であることを知ってわざと中断したのだ。

屈辱とはいえすぐ近くに迫った快感をお預けされ、本能的に失望の声が出たことに羞恥する。

【はは、イカせて欲しかったか?】

「誰が、そんなこと……」

【A I は正直だぜ?】

「っ……!」

絶頂寸前であることは、客観的視点を持つA I が証明してしまっている。朱くなって沈黙するゴーストガールに、男が一つ笑うと下半身を露出させた。

【安心しろ、こいつで初イキさせてやるからよ!】

「ひ……っ♥」

男が見せた肉棒。それは猛々しくそそり立って上を向き、データの肉体ならではの理想的な形状を誇っている。

男たちの言う通り、ゴーストガールは性の経験には量も質も、技術でも自信がある。男のような肉根を相手にしたこともあるにはあるが……胎の底から発情させられた今、見ただけで与えられる暴力的な快感を察してしまい、喉が震え上がった。

「何よそれっ? どうせ、データで作った偽物なんでしょう? 素の自分で犯すこともできない、卑怯者——」

『警告——この攻撃を受ければ、あなたのライフはゼロになります』

【だとよ。そろそろトドメを刺してやるぜ】

「——や、やめなさいっ! そんなもの、近付け……あっ♥」

(こんな凶悪なもの♥ 挿れられたら——♥)

偽物だろうと本物だろうと、こんなものに犯されればタダでは済まない。無理矢理に絶頂させられる屈辱と恐怖にもがくが、先端を宛がわれて身体が硬直する。言葉が詰まり、ゾクゾクと甘い電流のような期待感に包まれる中、男が腰に力を入れ——

ずっばおっ!

「あああああああああっ♥♥」

巨根が一気に突き立てられた。長い肉根は一突きで最奥まで届き、ゴーストガールの膣壁を抉って子宮を打つ。

その快楽は圧倒的であり、今までのどの経験をも超える。寸止めされた状態でそんな快楽に耐えられるはずもなく……挿入の一突きにより、ゴーストガールは遂に絶頂。仰け反って牝の叫びを上げさせられる。

果てたことで震える牝壁を感じている男はもちろん、ハックされたステータスのライフもゼロを表示して見て

いるだけの男たちにも絶頂を知られる。

【へへ……おい、挿れただけでイキやがったぞ！ 淫乱女なんて一皮剥いてやりや大したことねえなあ？！】

「あ……♡♡ あああ……♡♡」

(そんな……♡ 私が、こんなヤツに……イカされるなんて……っ♡)

犯され、絶頂する瞬間をこの場の男たち、更に録画ツールにも共有される。今朝までは考えられなかった悲惨で淫靡な事態に、データ改竄のせいとはいえ男に対する敗北感に吞まれそうになる。

【どうだ、普段から誘惑してるくせにあっさりイカされた感想はよ？】

「あ、あら……勘違いさせちゃったかしら？ これは、私がイッてあげたのよ……♡

あなたが、あまりにもお粗末すぎるから、ついサービス」

ばんっ！

「んおっ♡♡」

精神と態度だけは吞まれまいと、敗北感を押し隠してみせるが、更に一撃与えられると、不敵な笑みも吹き飛んで眼が上を剥き、間拔けな表情となってしまう。

【一突きしただけでアへってんじゃねえか！ 強がってんじゃねえっ！】

ばんっ！ ばんっ！ じゅぷんっ！

「だ♡ 誰が♡ アへってなんか♡ あひっ♡ ひいっ♡」

(こ♡ 声が♡ 止まらないいい♡)

身体が抱え上げられ、立ちバックから背面駆弁へと体位が変わる。身が浮かされて激しく上下され、男ならではの力強いファックが有無を言わさぬ快楽を送り込み、男が言うアへ顔……眼が蕩け、唇がだらしなく開いた状態のまま喘ぎ続けさせられる。

「あっ♡♡ あふっ♡♡ あひいっ♡♡♡♡」

(私が♡ こんな風に犯されるなんて♡ こんなことおっ♡)

【突くたびにギチギチ締めやがって！ もっと堪能したいとこだが、後がつかえてるんでな……早速一発目イクぞっ！】

「な、なによっ♡ 随分、早いじゃないっ♡♡ 所詮、その程度ってことね♡ この、早漏っ」

ずばおっ！

「んおおおうっ♡♡」

過去の経験は、全てゴーストガールがリードして男を惑わせ、意のままに操るものばかり。男が主導する行為によって快楽を与えられるのは初めてのことであり、発情した今では倒錯的な被虐の欲求にも目覚めてしまいそうになる。

男が早々に射精することを煽っても効果はなく、逆に最奥へ強い突き上げを喰らって獣のように哭き叫ぶ。奥深くまで突き刺さる肉幹が逞しく脈動し、精液が迫るのが伝わってくる。

電脳空間、データ上でのこととはいえ、やはり膣内射精はこれ以上ない屈辱。蕩けた貌のまま拒絶し、震える

手で肉棒を押し退けようとするが、とても止めることなどできず――

「やめ♥♥ やめなさっ♥♥ それだけはやめ――」

(出される♥♥ 中に♥♥ こんなヤツの♥♥ こんなものの精液が――♥♥)

ドクッ!!! ドプッ!!! ドビュルルルルルルッ!!!

「んあっ♥♥♥ あ♥♥♥ あああああああああああああつ♥♥♥」

一際強い痙攣の直後、大量の熱が注ぎ込まれる。データの身体が焼かれるかと思えるような熱が体内を埋め尽くし、子宮内部を蹂躞する。

ウイルスの効果によるものか、現実ではありえない膣内射精の快楽。その威力はとても耐えられるものではなく、ゴーストガールは深いアクメに昇らされる。

「あ……♥♥ いやああ♥♥ 中に……っ♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！